

このコーナーでは、教科書に掲載されている生徒作品を取り上げ、奥村高明先生に、その作品の見方や考え方を紹介いただきます。

**奥村 高明**  
 おくむら・たかあき  
 聖徳大学児童学部教授。  
 1958年宮崎県生まれ。  
 小・中学校教諭、美術館学芸員の後、  
 文部科学省教科調査官として  
 学習指導要領の作成に携わる。  
 専門は図画工作・美術教育、  
 鑑賞教育など。芸術学博士（筑波大学）。  
 『子どもの絵の見方～子どもの世界を  
 鑑賞するまなざし～』（東洋館出版社）、  
 『美術館活用術～鑑賞教育の手引き～』（  
 美術出版社）など、著書多数。

### 1. 作品からわかることは1割

大人は大人になってしまったがゆえに、子どものことがわからなくなってしまふ。そこで、何とかして子どもが何を感じ考えているかを探ろうとする。その一つが作品からの分析だ。でも、作品だけからわかることは1割程度にすぎない。わからないことの方が圧倒的に多い。子どもの作品には大人が考えもしないことが実現されている場合もある。

### 2. 絵に関する疑問

本作品では、傘を見下ろすというアイデア、斜めの構成など、次のような疑問がたくさん生まれた。

#### (1) アイデアについて

●傘を真上から見下ろした絵のアイデアは？ 経験から？ 写真や映画などの映像から？ 先生の指示？

#### (2) 傘の形や色について

●折り畳み傘、16本骨傘などいろいろな種類の傘があり、かなり正確な作図だ。調べて描いたのか、見て描いたのか？

●どのように色を決めたのか？ 中央の傘が目立つように配色したのか？

#### (3) 画面の構成について

●画面の全体を右上から左下へと斜めの構成にしたのはなぜか、人々の動きを表したかったのか？

●歩道のブロック、反射板、水たまり、波紋などの要素を入れたのはなぜか？ 雨粒を描かなかったのはなぜか？

●真ん中の傘だけ赤い靴が見えている。構成上のアクセントか？ それとも傘を差すおもしろさや雨靴を履く楽しさを表したかったのか？ 他に伝えたいメッセージはあるのか？

#### (4) 指導について

●授業中の作品か？ 夏休みの宿題か？ 美術部か？

●先生と描き方について相談したか？

### 3. 疑問への答え

疑問に対しての作者の答えは以下である。

#### (1) アイデアについて

当時、私は美術部が出品する展覧会のために、傘の形や特徴を題材にした絵を描こうと考えていました。どこから見た傘がいちばんおもしろいだろうと想像し、上から見た傘を選びました。

#### (2) 傘の形や色について

同じデザインのもを描くのがつまらないなと感じたので、学校にあった忘れ物の傘を数本借りて、友達に傘を差して下を歩いてもらいました。それらをもとにコンパスと定規を使って下書きをしました。

配色は、塗りたいと思った色そのまま塗りました。中心は目立つほうがきれいかなと思ったので濃い赤にしましたが、その他はモデルにした傘の色をまねたりしました。

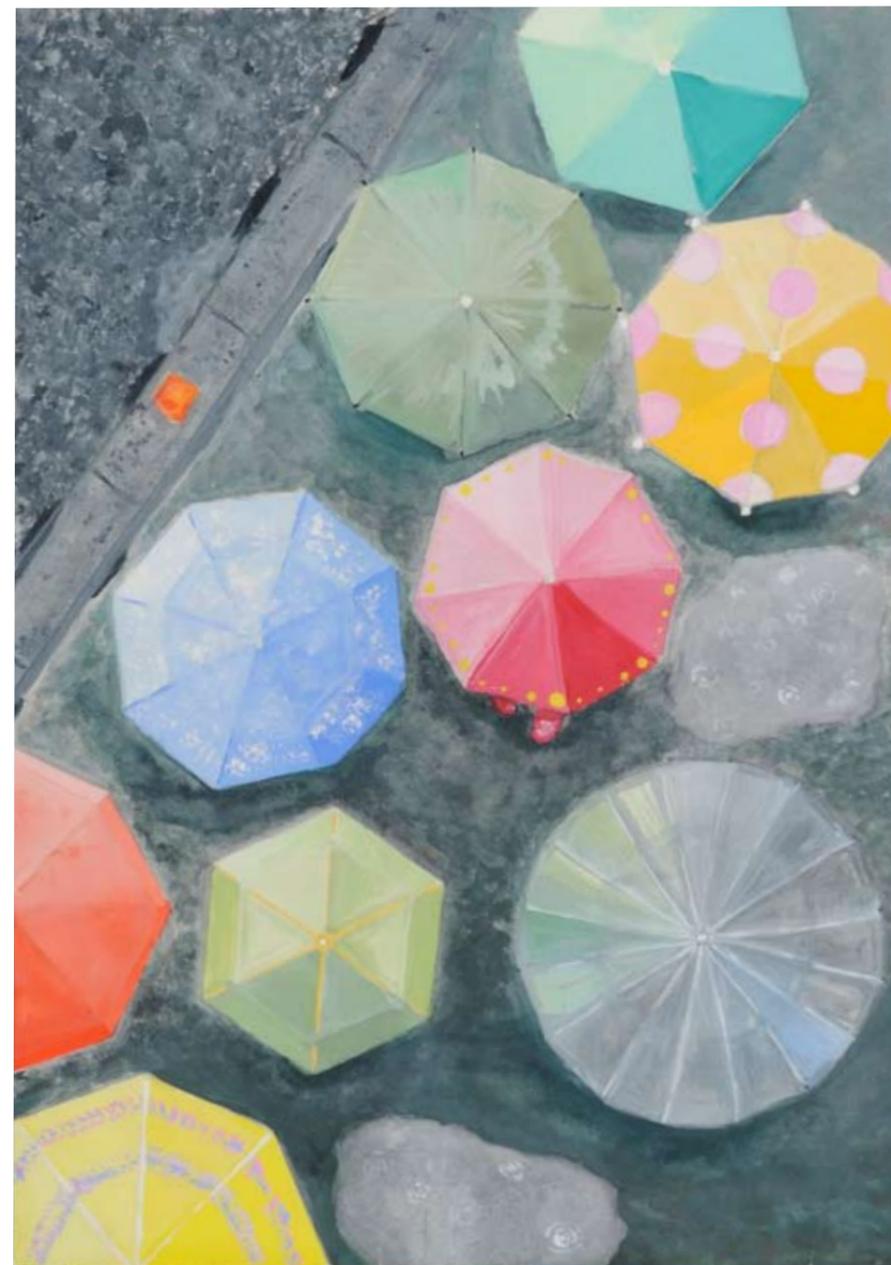
#### (3) 画面の構成について

あえて雨粒を描かずに、雨が降っている表現をしたらおもしろいと思ったので、傘、水たまり、たくさんの小さな波紋を描きました。地面はアスファルトの歩道と車道です。通学路の上から見た様子を想像して描きました。私の描いてきた絵は大体斜めの構図になっています。「縦か横」と決めつけたくないのでしよう。

#### (4) 指導について

ほとんど塗り終わってから、先生にアドバイスをもらいに行くと、「この人たちはどっちに向かって歩いて

いるの」と聞かれました。私は右上から左下に歩いているイメージだったのですが、先生は「逆に見える」と言いました。そこで、靴を描いて進んでいる方向を示そうと思いました。すると、赤い傘の女の子だけ逆行しているような絵になりました。でも、そのほうが意志をしっかりとっているみたいでかっこいいなと思いました。



【傘】  
 紙、水彩 27.8×27.8cm  
 『美術2・3上』P15に掲載

### 4. 作品と答えからわかること

配色に見られる中心という概念、構図、想像と観察と作図で作り出された傘のリアリティなど疑問は全て解決した。そしてこの子が、自分の表したいことをもとに、できつつある画面と相互行為を繰り返し、友達や先生とコミュニケーションしながら制作し続けたことがわかった。

何より、実に論理的だった。「絵は感性」とよく言われるが、作品の制作は、自分の行為や感覚をもとに、知識や技能、経験などを駆使し、思考や判断を繰り返しながら、何が必要な要素かを選び出し、これを論理的に組み合わせ、自ら価値を作り出していくという知的な作業だ。本作品と作者の説明は、そのことを見事に証明していると思う。